

『弓取町人』

泉鏡花

—

「もし、佐野屋の旦那。」

「何うした、關取。」

「關取なんて言ひつこなし。あれ、だから歩行振まで、のさり／＼と氣取るぢやあゝりませんか、可恐しい。」

會津若松の城下を、八月十二日の月夜に西の方を指して三人連、佐野屋の旦那と呼ばれたのは邊の小間物屋の主人で、質素な中形の浴衣に博多の帯、白麻の褌衣を着て居る。關取は名を東山といふのであるが、敢て番附面の何段目を取るといふ凄いのではない。大町の町盡に土藏附茅葺の大家、小作を取つて居る田地持の次男で、小力があつて、宮角力の土着かず、今日の大關に合ふ作太郎といふ壯漢。白黒段々染の浴衣を筒袖にして、づんぐりした身に絡ひ、縮緬の扱帯を前結にしてゆさり／＼、故と太い聲でものをいふ。いま一人は白褌衣、紺飛白紺足袋で、麥藁の帽を戴いた、市役所の月給取で、いづれも九重樓とい、遊女屋の裏の空地にある大弓場金的の定連である。

此の月給取、小此木が眞先で、

「何うです些と急がうぢやあゝりませんか、外へ行くんぢやあゝりませんかからね、晩くなるとお城の中は不氣味でさ。」

佐野屋は背後から笑を含んで、

「何、先生、それといや關取が居まさ、其處は安心ですよ。」

「はい、私が附いて居りや、旦那方に怪我はさせませぬ。」

と生ぬるく引張つて、けだるさうなもののいひを遣る。

小此木は苦い顔して、

「佐野屋さん。」

「へい。」

「貴方が又何もやけに、關取なんておつしやることはありませ
んや、其でなくつてさへ、作の野郎、氣取りたがつて、うづ／＼
してる處へ、水をお向けなさるもんだから、何うです彼の聲は。」

「そりや不承してお遣んなさい。おなじ甚句だつて藝者のと角
力のは丸で以て音色が違ひまさ、破太鼓のやうな聲を出す處が
角力取にやあ賞目さね。いくらお耳障でも到底清元や二上のやう
な、意氣な音が出るもんぢやありませんから、職業に免じて
其處は間流してお遣んなさいまし。」

「やあ、役場の先生、こりや唯今旦那のおつしやる通りでござ
す、お聞辛かるが御免くだあれ、其代にいざとなりや。」

關は往來で仕切の身構。柏手を丁と打つて、

「狐でも狸でもお茶の子でござんすわい。」

小此木は興の覺めた風をして、

「不可、もう我輩ものいはずだ、情無い。」といつて急足に
なる。

やゝ小半町、皆黙然で歩行いたが、忽ち思ひ出したやうに一齊
に吹出した。

「はゝゝはゝおい、作さん、何しろ大丈夫かね、君は力はある
だらうが、化物は何も逆におんぶをして急所を狙ふと極つてやし
ないぜ。其に武藝の達人かして、可恐しく弓が上手だつたといふ
ぢやあないか、飛道具で遣られた日にやあ、如何に君だつて一堪
もありやしまい。」と小此木は氣遣ふ様子、佐野屋は事もなげに、

「其處へかけちやあ鍛へてあります。何、小此木さん、若湊のヨイシヨコラでも、うむと張つて撥返さうといふ胸だ、生得の一枚肋、胸板は伸金のやうですから、化物の外矢なんざ突通る氣遣なしさ、ねえ關取。」と又しても人の悪い。

二

作太郎關は之を聞くと有為顔に丁と胸を叩いて、又鐵砲でも持つて來い、》力足を踏張つた。

「これだ、はあ、之だ、矢でも案ずることはござんせんわい。」
丁度士町に掛つて人通がなく、誰も見る者がなかつたけれども、關取が此の容子を見たらば噴飯せずには居られまい。

然るに一行三人の殿、いざとならば矢表に立塞がらうといふ關取の背後を少し放れて、一切を見つゝ聞きつゝ片頬笑もしないで、澄して跟けて居る一人の婦人がある。

佐野屋は見向きもしないで居たが、關取が今の矢でも鐵砲でも持つて來いで、胸をどんが、餘り仰々しかつたから、何心なく振返ると不圖其姿が目にと留まつた。

恚う月明に透かすと、件の婦人は、背後へ影法師を曳いて、一行と齊しく東山の月に向つて歩を移すので、白銀のやうな艶々し

き薄煙のために、少しばかりだけれども、間を隔てられて判然とは見定められず、茫然と白く、くつきりと黒く、浴衣に羽織でも襲ねて居ようと思はれる、すらりとした風。

佐野屋は之を、丁度關取の肩越に頤を上げるやうにして見つけたが、何氣なく、又歩き出した。

「小此木さん。」

「えゝ。」

「串戯は止して、淋しうがすな、未だ宵の口なんでせうね。」

「此頃ですから最う其でも十時にやあ成りましたらう。一體、用のある處ぢやあないんで、夜になつて此處等歩く者はありませんや。」

「然やうさ、考へて見たつて、私どもは土地兒なんだけれども、月明にお城の道筋を通つたことなんざあゝりませんからね。謂つて見りや物好き。」と又一寸と背を見ると、婦人の姿は近寄らず、敢て遠退もせぬ。

「で、何ですか、其の金的へ顯れたといふのが、宇賀神堂の中の何の神様にか面影がそつくりだつたといふが本當なんですか？」

宇賀神堂は飯盛山の頂にある、二間四面の阿彌陀堂で、永徳年間、今より五百二十餘年前の建築であるが、近きころ、傍の榮螺堂から、彼の白虎隊が、劍を提げ、戈を横へて、匕首を押し、或は小手を翳し、或は足を躓てなどした、いづれも黒髪を亂して、白の鬚卷、裁着袴、武者草鞋の、身輕に申斐々々しく武装した、おなじやうな白面朱唇の美少年の、衣の色まで彩色した彫像の數十九を、此處に移して安置した其である。

何人か此處に其の神の俤が肖たかといふのを、佐野屋は聞きもあ

へず、

「そりや確です。喃、關取。」

關取は相變らず、人困らせの難澁な聲をして、

「はゝい、私も見ましたで、疑はごんせんがい。」

小此木は之を聞いて長歎した。

「あゝ、助からない。」

「もし、場所柄ですから、気障なことをいひツこなし。」と佐野屋の擔ぐにはいはれがある、背後の婦人。

「一寸。」といつて、小首を傾けながら間近に見ようとして後へ退つた。

關取は然りとも知らず、

「はゝあ、徐々おん前達でごんすかい。」と、のはゝんで前へ廻る。

佐野屋は立留つて、ト透かしたが、丁度女の顔のあたりは、黒板塀の陰になつて、胸から裾へかけて唯これ、すつきりと水が垂りさう。

婦人の姿は放れず、去らず、今も相變らず見え隠れであつた。

「おい。」といつて、佐野屋は又入交つて關取の前へ出ながら、

「小此木さん。」

「え。」

「何時でせうな。」

「はあ、矢張り十時頃でございませうよ。」

「然うですか。」とばかりで何か調子まで沈んで来た。

「十時が一時でも可うごんす、東山が居りますで。」

佐野屋は慌てたやうなものいひで、

「關取、文句を言はないで一吋背後を見な。」

「何でごんすぞい。」

「可いさ、ごんすでもざんすでも構はないから、關取、振返つて見ないか。否さ、お前、人間なら一吋背後を見られるかい。」

「背後がどないでごんす。」

「何大したこともないがね、小此木さん、一吋、」といつて、佐野屋は小刻に縋るが如く、前へ行く男に引添ふと、關取は、今ものありげに言はれた背後を振向かうとして立停つたが、俄に怖氣がついて首の骨が固くなつたので、怪訝な顔を真正面に据ゑながら、口ほどにもない、ひよこ／＼と走寄つて、

「何だね、旦那え？」

「様あ、到頭本音を吹いた。」と小此木は打棄るやうにいつた

が、恚る中にも極めて眞面目である。

「關取、何でも可いから、後生だから、まあ振向いて見るさ。」

お頼だ。」と促す佐野屋の傍に立つて、關取は右左を二したが、背後へは首が廻らず、きよろ／＼して、

「何うしたんだね、何がだよ、旦那、をかしいな。」

「をかしがあ無いよ。ふん、憚りながら、これ、ものをかしいやうな事なら、心配はしないけれども、何うだね、見る氣はなしか。何、生命に別條はないだらうが、」

「何だつて、旦那。」

「餘り心持の可いものぢやあないよ。小此木さん、變に恚う魔がさしたやうですが、何なら今夜は見合せませうかね。」と佐

野屋は大方ならず怯えた様子、小此木もまご／＼して、

「其も然うですが、だつて何でせう、一件は其の跟いて來るといふんぢやありませんか。引返す途端に鬼になつて、ばあ、な

んざ下さらないね。私もぞく／＼して、顔がもうこれより背後へは向かないんで、貴方又下らないことを云出したもんだから、」

「否、全くだから仕方がありません。私は矢張振向くのは少時御免だ。關取、」

「はい。」とまじ／＼して、何か急に鹿爪らしくなつた。

「お前何うだね、矢でも鐵砲でもぢやあないか。おい、東山がついてるんだぜ。」

「へ、旦那、串戯をいつちやあ不可ません、そんな事を聞くが最後、先方ぢや私ばかりしを目壺に取りませあ。」などといふさへ、怪しいものが聞かうかと、密々聲で、三人とも月下に影を小さくして竦んだが、やがて小此木が立直つて、

「男だ、此處まで來たものを一番お城まで遣つけませう。一體お話の様子ぢや我々は神慮に合つて、其處でお姿が、顯れたとい

つたやうな譚わげなんですから、途中とちゆうで怯氣おくれが出るやうぢや、お見限みかぎりを蒙かづむらうも知れない。とまあ云つたやうなもので、ふとすると、其そのうしろの一件けんで度胸どきゆうのほどをお探さぐりなさるのかも知れませんや。ですから、兎とも角かくも行くことにしようぢやあゝりませんか。」

「御尤ごもつともで、」と言葉ことばまで慇懃いんぎんな、佐野屋さのやはいゝ年紀としをしなから、意見いけんをされて畏かしこまつたと云いふ形かたちである。

四

さて三人さんにんは、いよゝゝ若松城わかまつじやうに向つて進むことになつた。早はや此處こゝからは遠とほくもない、唯ただ一點てんの灯あかりもなく、月明つきあかりで星ほしさへ見えぬ前途ゆくての空そらに、一帯たいち地平線へいせん上に白氣はくきを籠こめて、すくゝと目に遮さへる黒くろい柱はしらは、これ即すなはち外廓そとくわくの松まつの樹立こたちである。月の隈くまは唯ただ其そればかり、顔かほを見合みあはす人々ひと々の瞳ひとみも見えて眞晝まひるのやう。

「傘からかほあ！」と關取せきとりが呶つぶやいた。いづれも理りに沈しづんで默然だんまりの處ところ、佐野屋さのやは吃驚びつくりして、

「何なんだ。」

「傘からかほだ。」

「傘からかほが何どうしたと

又また不思議ふしぎなことを言い出すぢや無ないか。

つまゝれ染た、何のことだ。」

「傘かね、」

「これさ。」

「えゝ、傘あ。」

「あれ！

背後の方から變になるぜ。」と寂しい聲をする。小此木は苦

笑して、

「唄の出損ねなんですか、野郎、震てるから調子が出ないんで

すよ。關取おい、しつかりしないか！」

「傘！」

「そら来た、（手に持ち 佐野屋の旦那、一番景氣をつけ

ませう。」

「なるほど、其で落着いた：（皆さん然らば）とかね、」

「やれこの、のんのこさい／＼、はゝゝはゝゝ、」と小此木は元

氣づく、關取も勇をなして、

「然らばお先へ、やれこの、参りますぞえ。」三人が、

「のんのこさい／＼。」

恣く一行が夜道を侵して七日町から出て来たのは、次に説く如き仔細があつたのである。一體、此の三人に限らず去年の夏あたりから開業した九重樓の裏の大弓場金的是尚武の氣の壮なる土地の人氣に合つて、目覺しく繁昌する。中にも此の佐野屋といふのは、金子が廻つて世話焼の上に大の横好で、毎夜詰切の上華主。

近頃同好の人々を語らつて、武道長久、弓術の上達を祈るため、堅帽子で引く連中出合ひで、白木の弓に大鳥の羽の四ツ矢を添へて、之を一國の粹として、他に誇れる、十九の神將、彼の白虎隊の彫像を安置した宇賀神堂に謹上再拝と奉つた。其が神慮に合つ

たやうに各々が思ひなしてか、一人に勵が出た。然るに、此度舊藩主某侯の息女、竹姫といつて御年二十にならせらるゝ、豫て心ざま雄々しく、絲竹の調よりも、却つて國家の軍事に耳を傾け給ふ由、學校の運動會には、婦人財囊を寄せられるので、牛打つ童まで知つたのが、疾より然る近衛の將軍と縁組が定まつて愈今年天長の佳節、白菊を活けた電燈の目映い館で式を擧げることになると、御名殘傍々一度故郷を御見物といふ觸で、一昨日から此の若松に来て逗留あり、有志團體が思ひ／＼の趣向を凝して、壮に歡迎する中に、金の定連も祝意を表して、幕を張り、水を打ち、軒には鬼灯提灯、庭には篝火、射場に氷水の硝子杯を取寄せながら、射割だ、金的だと取替へ引替へ前へ寄つた、落ちた、背後だ、引摺つた、南無三寶幕を射た、イヨ當りなぞと、笑ひ動揺いて鼻息の荒い天狗連、別けて此の三日、殊に今宵は、寄つて集つて射たわ／＼。

五

三萬三千三百十三さるほどに少しも中らず、ほつとして連中一呼吸を吐いて居る處へ、ぶらりと入つて來た一個年若き人物があつた。眉目俊秀、中肉中脊、質素な單衣に紹の紋着羽織、麻襦袢、

白足袋で、品の可いきりゝとした風。

此の邊につひぞ見掛けた事の無い人柄であつたが、片肌脱、又は大肌脱、中にはいきり立つてやけに向う顛巻をしたのだが、瘦せた小角力が並居る形で、團扇と、扇子と、氷の硝子杯と錫の匙と手の上げ下げに入亂れた定連へ、靜に目禮して四分五厘といふ弓を撰び、押手に取つて矢筒を引寄せたから、何を外矢め、今に弦の中から尺五を覗いて、耳を引拂ふのが落だらうと、目と目に冷笑を帯びて流眄にかけて居たのである。

來客は射前も見事に、はじめは正面の尺五的へ十と射あてゝ一筋もそらさず、矢筒を取交へると大前の射割を狙つた。いづれも屹と瞳を据ゑると、上下を挟んで二矢を外したから、然もあらむと定連が顔を見合せて北叟笑をする。

途端に弗と射た、矢響とゝもに射割は二と碎けて散つた。續いて其次、又其次、尺五的を眞中に挟んで、前後に四枚あつたのが、弦鳴に應じて、菱形の板は恰も雪の消ゆるが如く、カチリ、颯と碎けて、木屑も残らず、あづちばかりが黒くなつた。

來客は其まゝ射がけを脱いで指置いて、帳場へ勘定を置くと、後を振り向きもしないでふいと出たが、大弓場へ入る路地の角、九重樓の土藏と合の角に成つて居る、蛇の目鯨の看板を横切つて、七日町の通へ出たと思ふと見えなくなつた。

先刻から呆氣に取られて居た連中が、俄にわや／＼と動揺きはじめ、何だ、誰だらう、何處の者だと、皆が口々、待ちねえ、と

いふが疾いか、駈出しの勘次といふ、ポンプの筒先が身軽に躍出した。やゝ暫く其噂の止まない處へ、呼吸を切つて駈けて歸つたのを、取巻いて、何うしたと聞くと、不思議だ！ はての、途中で消えて了つたかい。いんえ。ぢや、些少は妬けたのか、何をいやあがる、恚う馬鹿にしちやあいけねえ、彼あ唯者でねえぜ。何故だといつて、ずん／＼お城の中へ入つて行つた、といつたので

何お城へ入つた。彼の城跡へ、今時分をかしいな、と皆小首を傾けたが、他國の者が来て見物に行つたと極めて了へば其丈のこゝとを、何うして眞晝間日のあたる時でも、一人ぢや草刈に入らないう處だ。何處に陥穴があらうも知れぬ、可恐い草原へ夜踏込むのは容易でないと、一人が怪む、かと又然ういへば何處かで見えやうな立派な顔立だつた。然うだ、宇賀神堂の白虎隊の中に誰やらそツくりなのがある。違えねえ、成程、己も見た、私も見た。惟ふに此間奉納した連中の弓矢を感應あつて、中にも弓術に長けたが、此際姿を顯した者であらう。歸道は飯盛山でなかつたのが讀めないけれども、一體城のために一命を捧げた人々であるから、魂魄は其處に留まつて居るものと見えるといふ事に極めたので、奉納を發起した佐野屋は一方ならず面目を施して、此まゝでは残多い、然ほど靈驗あらたかに在さば、城へ入つて最う一度と、半は乗地の愉快づく、大人氣ないといふ者やら、おつくぶがるものやら、中には全く、不氣味で二の足の輩もあつた。そこで關取と二人。出がけに來合せた小此木は、大のものずきだから、おいそれ、到頭三人で來たのである。

「小此木さん、此から先ですよ。」

「大分何うも、」とばかりで、城の大手門の趾の、外濠を左に控へた土塀の石垣の前に立停まつた。既に白氣の中を貫いた松の木的一本二本は潜つて來たので、薄は肩に擦合ふばかり、三人の身體は草の葉に隠れて、三ツの首は天窓黒く、其の薄の穂と並んで据つたまゝ動かなくなつたのである。

「中は眞暗ぢやあゝりませんか。」と、小此木は不氣味さうに及腰で差覗く。佐野屋は空を仰いで見ながら、

「森がありますからね、此塀の上のだつて何百年経つてるか知れませんか。」

「へい、彼方から見た分にや、何の事はない、杉箆がひよい／＼立つてる位なもんですな。」

「時に何うしませう、小此木さん、一體何時でせう。」
小此木は聞くと情なさうに、

「何うも君の其時間をお問ひなさる音色といふものは容易でない。何となく私あ夫を聞く度に引入れられさうになりますよ、もう遣切れない。」と溜息をする。

「えゝ、成程いかさま其處もありますな。」と佐野屋もとつちて梢げ返つた。關取は謂ふまでもないが、言句も出でず、月は松の木の間から、小さな形を遠く見せて、森として風もなく市中を縦横に貫き流れる猪苗代の湖から引いた用水の音が遙に響いて凄

じい。

憚る時、さら／＼といふものゝ音、三人は露が薄に上るのだと思つた。

然るに關取の直ぐ背後へすつくり立つたのは婦人である。はつと思ふ途端に、臆病ものべた／＼と早腰を抜かした。凡そ豫ていひ合せてする事ども、憚うは行くまい一所に蹲んで居窘まつた。關取の如きは血迷つたか、

「傘あ、」とあるか無きかの細い聲をして震へて居る。三人の前をすつと横切つたが、慄然とすると通過ぎて、後姿になつた、顔ばかり振向けて屹と見る、月は半面を掠めて片頬蒼白く、鼻筋の通つたのが、星眼を開いて、

「皆お歸り、此處は来る處ぢやあない」ときつぱり。

其まゝ月を浴びて水の蜒るがごとく、ゆら／＼と動いて向うへ歩を移すと思ふと、石垣に着いて大手の暗い中へ跽音をさして鮮麗に入つたのが、はつきり見えた。

同時に、息を凝して居た關取が、わツ！と云ふと跳上つて突飛ばされたやうに、ばた／＼と舊來た道へ逃出した、之と手も足も結へ附けてあつた如く、小此木と佐野屋が肩を組んで一目散。

【完】